

グループディスカッションを取り入れた情報モラルの授業 4 回

授業実践報告と生徒へ提示する課題の検討

神奈川県立港北高等学校 三宅 勇輝

グループディスカッションを取り入れた情報モラルの授業を4回にまとめ、行った。内容は「個人情報の保護」、「インターネットの特質と個人の責任」、「デジタルデバイド」、「情報の信憑性」である。授業回を追うごとに生徒に提示する課題の内容が深くなるように配列をし、ワークシートへ考えをまとめさせた。授業を重ねるごとにグループディスカッションへの取り組みなど生徒の学習活動は深まった。しかし、生徒へ提示する課題には問題があったため、来年度へ向けての授業内容の検討を行った。

1. 実践報告の目的

本校では、「社会と情報」の授業を1年生全員必修で行っている。教科情報は新課程に移行したが、昨年度の授業内容で改善しながらも残す課題を含めつつ、大部分で1学期の授業内容を変更しながら行った。今回取り上げる情報モラルを意識した4回の授業については今年初めての試みである。

本提案は情報モラルの授業4回の内容とねらいを紹介し、特に4回目にあたる「情報の信憑性」の授業実践報告をする。また、グループディスカッションを取り入れた授業内容における生徒へ提示する課題の検討を行い、来年度へ向けた授業改善を目的とした。

2. 学習指導要領と情報モラル

2.1 情報社会に参画する態度

学習指導要領^①において情報教育の目標の中に「情報社会に参画する態度」として情報モラルに関係する内容が盛り込まれている。これは、共通教科情報科の目標にある「社会の情報化の進展に対応できる能力と態度を育てる」を達成するために必要な能力である。また、「社会と情報」の教科の内容にある「情報社会の課題と情報モラル」を具体的に達成させる目標でもある。したがって、情報モラルという能力や態度の育成にあたっては、すべての授業内容に横断的に学習すべき内容である。しかし、今回情報モラルの内容を単元として具体的に数回の授業内容で取り上げた理由は、次に説明するグループディスカッションとの関係にある。

2.2 グループディスカッションと情報モラル

学習指導要領解説にある「内容の取扱いについての配慮事項」において情報モラルについては、「生徒が自ら考え、討議し、話し合う活動を多く取り入れるなどとして」という記述がある。このことを踏まえグループディスカッションを取り入れた情報モラルの授業を一貫して行うことが望ましいと考え、生徒の学習の深まりを期待した。

3. 単元計画

3.1 単元目標

単元目標を「情報社会において主体的に参加ができ、対応できる能力を身に付け、自分の考えを持つことができる」と定義した。これは、グループディスカッションを通じて、自分の考えを最終的にまとめられ、自分の考えを持つことにより情報モラルの育成を念頭においた目標である。

3.2 授業計画

情報モラルの授業をコンパクトに4回にまとめて行った。これは、1学期中に行われた他の授業の合間に4回の授業を織り交ぜ実施をしたので連続して授業を行っていない。内容は「個人情報の保護」、「インターネットの特質と個人の責任」、「デジタルデバイド」、「情報の信憑性」である。各授業のまとめとして、生徒自身の考えを書かせるための課題を設定し、グループディスカッションを行った。また、その課題の内容を簡単なものから難易度の高いものへと移行させるように配列をした。これは、グループディスカッションに慣れさせることや質を高めさせることで、情報モラルの育成を図ることがねらいである。

4. 情報の信憑性に関する授業実践

4.1 情報の信憑性の取り扱い

情報の信憑性とは、「情報の正確さや信頼度」であるが、使用している教科書^②では、「誤った情報や偏った情報が提供されている場合があり、他の情報と比較することによって信憑性を確認する必要がある」と記述されている。また、情報Aの教科書^③では、「伝達するメディアが異なれば情報の受け取る側の印象が異なる場合がある」と記述されている。このように単に情報の正確さだけではなく、何か目的や疑問に対して情報収集した場合、印象を含めた信頼度までも考慮して情報の比較をさせる必要がある。また、印象については人によって異なることも考慮すべきであり、これらについて学習できる課題の設定が必要と考えた。

4.2 授業展開

今回の授業では、東京のオリンピック招致のため猪瀬東京都知事がスポーツアコード会議においてプレゼンテーションを行った内容を題材とした。テレビニュース⁶⁾と2社の新聞の記事⁽⁴⁾⁽⁵⁾を比較し、そこから得られる情報をもとに、分かることをまとめさせる授業展開である。各メディアにおいて書かれている内容が異なり、特に猪瀬知事が以前イスタンブールに対して失言をし、その後撤回した問題について今回のプレゼンで東京へのイメージが解消されたのが焦点となっている。各メディアの情報の伝え方や印象の違い、記事の内容から新聞記事の面積や写真、図の使用の仕方まで幅広く違いを捉えさせることをねらいとした。

授業の流れは、授業の導入部分においてテレビニュースをPCで見せ、内容をおおよその範囲で把握させたのち、新聞記事の比較を中心に行った。比較の際には、「記事冒頭部分を5W1Hに分類をし、情報を抜き出す作業」、「見出しを見て記事の内容を予測させることや、印象を記述させる作業」、「記事全体を比較し違いを記述させる作業」と3つに時間を区切り、ワークシートに記述させた。上記の作業すべてにおいて4人ほどのグループ内で考えを発表させる機会を設け、生徒の考えを深めさせている。グループのメンバーは情報モラルの授業4回とも同じメンバーである。また、記事の違いについて話し合いをさせる際、「記事によってどのような違いが生じ、情報の信憑性の差が生まれるか」という問いを含めて話し合いをするよう提示した。授業の最後に「複数の情報源を比較することにより、どのようなことが分かるか」の問いに対して、個人でまとめさせた。

4.3 グループディスカッションの様子と検討

4回の授業に渡り「個人での考え」、「グループでの発表」の順で行ったが、最後の「情報の信憑性」に関する授業に至るまで話し合いの言葉数や学習の深まりは進んだように思える。時間に区切りをつけ、数分ごと制限を加えた中で活動を行わせたことにより、授業を効率的に行うことができ、生徒へ何を作業するのかを明確に提示できた。また、1年生の初めからこのような活動を取り入れたことは、自分の考えを他人へ話すことの抵抗感をなくす結果となったようである。

4回の授業の中で行えなかったことについて、改善点がある。グループの中で意見交換はできたが、クラス全員に対して各グループの発表を行い、考えを共有する作業は行っていない。一部の生徒に質問をし、授業中発表させることもあったが、グループディスカッションのまとめとして発表させる授業計画も今後の視野に入れていきたい。

4.4 評価規準と結果

評価規準に関しては2項目ある。情報モラルに対しての評価であるため、「関心・意欲・態度」の1観点と割り切った形で評価した。

1つめは授業態度である。「授業への取り組み」、「ワークシートへの記述量」から評価をし、2つでA、1つでB、満たない場合はCとした。この観点に関しては、ほとんどの生徒はAであり、1部B評価がいるが、Cはいなかった。

2つめは、最後のまとめの部分に関して次の内容が含まれるかどうかで評価をした。複数の情報源を比較した際、分かることにおいて「記事の内容や印象に違いが生じる」、「同じ記事を読んだ際にも人によって情報の捉え方が違う」の2点である。

生徒の記述の結果は、2点の内容が両方とも含まれる生徒は少なかった。特に、「同じ記事を読んだ際にも人によって捉え方が違う」の内容が含まれる記述は少ない。情報の信憑性の捉え方や、他人との考えの比較をした際、くみ取れることを実感させるためには、生徒へ提示する課題を検討しなければならないと考えられる。

5. 生徒へ提示する課題の検討

授業を行って気づいたことではあるが、何に対しての情報の信憑性を確認するのか具体的な提示をせずに、情報源の比較から分かることに終始したものとなっていた。具体的に「東京はオリンピックの開催地となれるか、複数の情報源を比較しながら検討せよ」というような問いを授業冒頭に提示すべきだったと考えられる。このようにすれば、ディスカッションの方向性が示せ、グループにおける結論などをまとめさせることができ、学習が深まった可能性がある。また、「人によって情報の捉え方が違う」ことを実感させるためには、「情報の信憑性の違いは何によって生じるか」などの問いから生徒に考えさせることにより、生徒の記述の方向性も変わったであろう。

6. まとめ

「情報の信憑性」に関する授業を中心に検討したが、グループディスカッションを通して学習の深まりを期待する際には、生徒に対する課題として明確な「問い」が必要であると考えられる。

参考文献

- (1) 高等学校学習指導要領解説 情報編 (2010)
- (2) 高校社会と情報 p.14 実教出版株式会社 (2013)
- (3) 高校情報Ap.8 実教出版株式会社 (2012)
- (4) 読売新聞 朝刊 5月31日 35面 (2013)
- (5) 朝日新聞 朝刊 5月31日 1面 (2013)

引用・参考サイト

- (6) ANN ニュース 5月30日 テレビ朝日 (2013)